# Rudolf Hilferding の社会化論
## ——R. Hilferding 研究(1)——

米川紀生

Ⅰ 序
Ⅱ 社会化論の社会経済的背景
Ⅲ 社会主義化の条件（以上本稿）
Ⅳ 社会主義化の形態
Ⅴ 社会主義化の内容
Ⅵ 労働組合の課題
Ⅶ 小括

## Ⅰ

第一次大戦は、戦争遂行のための莫大な軍事予算と租税負担をドイツ国民諸階層にもたらした。戦争終了とともに生活の貧困化と生産力低下が、この戦争の矛盾として彼等を「社会主義化」[1]への要求へと駆り立てた。社会主義政党も又、社会の社会経済的基礎の変革は一挙に遂行できないという点では一致していたものの、社会主義化については諸々の意見が出て統一的なものはなかった。[2]

一九一八年一一月九日の旧体制崩壊にともない政権の座についたドイツ社民党は、早速翌一二月「石炭業の社会主義化委員会」(Sozialisierungskommission über den Kohlenbergbau)を設けて種々の社会主義化案を研究した。しかしこの委員会による暫定報告（一九一九年二月一五日）も、第二回委員会による一九二〇年七月三一日の提案も、結局は時の政府に何ら顧慮されることなく葬り去られていった。

本稿で問題とする R. Hilferding の社会化論も、上の二つの委員会のメンバーとしてその討論を通じて、更に両委員会の提案が葬り去られていく中で、形成されていった。[3] 彼は単に過渡期の政策としての社会主義化にとどまらず、社会主義の本質論にまでわたって検討を加えている。そこで以下、彼の社会化論を素材にしながら、彼が如何なる社会主義論を構築していったかを見ることにする。その際、彼の理論の一般的特質[4]及び理論経済学の性格規定との関連が当然問われるであろう。

(1) Sozialisierung は通例は、「社会化」と邦訳されているが、その本来の意味は「社会的になる」ということよりも、「社会主義化する」という生産関係の変革＝体制の変革を含意し、「社会主義のシノニム」と考えるべきである。Hilferding の社会化論も一応はそういう意味なのであって、その立場から労働者階級の主体的実践が問われている。表題では通例に従って「社会化論」としておいたが、その意味するところは「社会主義化」論である。SPD の社会化論の変遷過程は、さしあたり、篠原一『ドイツ革命史序

説」、岩波書店、一九五六年、及び阪上孝「ドイツ革命と社会化論争」「社会化の挫折とその思想的根拠」『経済論叢』、第九八巻第一号、第二号を参照。

(2) Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre vom Rudolf Hilferding*, Berlin, 1962, SS. 169—170.

(3) Rudolf Hilferding, *Die Sozialisierung und die Machtverhältnisse der Klassen.* Referat auf dem 1. Betriebsrätekongreß, gehalten am 5. Oktober 1920., SS. 20—23. 以下 Sozialisierung. と略称。

(4) 結論を大胆に言えば、彼の理論は論理主義と生産力上昇論と人間の平等性論との三者が一体をなすと考えられる。

## II

諸方面から出された社会主義化の要求は、如何なる政治的・経済的状態の下になされたか。先ず政治的状態についてみよう。

Hilferdingによると一一月九日の旧体制崩壊は、全ての権力をドイツの労働者階級の手に引継ぐはずであったが、彼等はこの権力引継を「物質的」にも「精神的」にも準備していなかったために、彼等自身が崩壊にそうぐうしてしまった。[1]「物質的」には戦争によって労働者階級の経済的力が弱まり労働者組織がその独立性を奪われてしまったこと、「精神的」には戦前の繁栄期にドイツ労働運動が純粋に社会改良主義的政策をとるにいたり、政治的権力の奪取よりも日常闘争を通じて自己の経済的状態を改善する方向に向かっていたことによる。従ってそこでは、本来の社会主義的・革命的目標は背後に退ぞいていた。[2]このように「物質的」にも「精神的」にも権力引継の準備ができていず政治権力の行使を忘れてしまった上に、労働運動は戦時中に始まったブルジョア政党との同盟を実践的に継続するという見解[3]をとるにいたった。大ていの労働者は「社会主義はなおはるか遠き理想」とみ、自己のもつ革命的力を資本主義社会内部での労賃上昇のためのストライキ運動に解消してしまった。上のようなドイツ革命の最初の時期には、社会主義化それ自体は進展しえないのは当然であろう。ブルジョア政党との同盟にしがみついていた労働者階級内部の政治家達は、「社会主義は現在実行されえない」と言い、戦争によって破壊された経済を社会主義化するのではなくて、「資本主義経済の崩壊後に、現存しているまだ新鋭のドイツの生産用具をドイツの労働者階級の生きた労働力と結合させ、かくして経済的力を我物とするために政治的権力を利用しつくすことだ」[4]と言った。だがもしこのような形で闘争を行なえば、プロレタリアートの権力を、革命期の政治的権力のみをもっている決定的時期に、無力化してしまい、ブルジョアジーの再支配を可能にする政治的後退を引き起すことになってしまうだろう。

次にこのドイツ革命期の経済的状態はどうであったか。労働者階級の状態は、革命当初は改善され、労働時間の短縮と労賃上昇が生じたが、それらはやがてインフレによる急激な価格上昇によって帳消しになるどころか、労賃上昇率以上の価格上昇

率によって彼等の現実的収入は減少し、彼等の購買力が価格上昇にとりのこされ、ここに彼等の生計の貧困化をもたらした。[5] 彼等の絶えざる貧困化に対し、資本家階級の方はどうであったか。かつての所有階級の中でも熟練者や事務員や地代収入生活者等々は没落してプロレタリアート化し、それだけ資本家階級の経済的力が弱化したように見えるが、実際はそうではない。労賃低下が利潤増大をもたらすのは言うまでもないが、彼等は更に異常な減価償却や準備金支払及び決算書のゴマカシ等々の経営技術的方法を通じて「資本主義の内的安定化」をはかろうと努め、集積・集中化を一層強化していった。[6] この傾向の発展により資本家の個人数は減少したが、彼等の力そのものは上の内的安定化機構を通じて強化され、かつては株式会社や大銀行によって代表されていた資本家階級が、「資本貴族」によって個人的に代表されるにいたるほどになった。資本の側での経済力増大と労働の側でのそれの低下。

以上のような現実認識に立って Hilferding は、この現状を克服する方策として社会主義化を打ち出す。その根柢には、ドイツの政治的革命が失敗に終ったという強い認識があった。更に彼は、この政治的革命は一時的なものであり、政治的圧制を廃止できるにすぎず、経済的搾取は残存すると考えて、[7] 政治的状態に目を向けずに経済的搾取の除去の方に注目する。彼にとってはこの状態を克服し、労働者階級に政治的権力の引継の準備をさせるためには彼等の意識に変化を生じさせればよいのである。それには彼等が従来からとりつづけてきた現状の物質的利害の改善という一時的利害に代えて、社会主義の希望と確信という一般的利害を置けばよいのであり、しかもそういう状態が既に熟していると Hilferding は考えるのであった。

つまり、彼は労働者階級の意識に変化を生じさせるような経済的基盤が存在するとみる。それは戦争遂行以来の資本の、とりわけ大工業の、組織の強大化と生産の組織性である。従来はそれが資本貴族の利害によって利用されていたが、それを現実に生産にたづさわっている肉体的・精神的労働者が利用しつくすように、「何らかの機関」(Hilferding はこれをプロレタリアートによって奪取された国家権力に求めずに経営評議会に求めている) によって組織変えを行なえばよいとする。つまり生産の組織を「資本主義的ヒエラルキー的 (kapitalistisch hierarchisch) に組織するのか、民主主義的社会主義的 (demokratisch sozialistisch) に組織するのか」[8] に労働者階級の社会主義化の政策の課題を置くのであった。

こうして Hilferding にあっては社会主義化は、経済過程における生産の組織化による生産力上昇を保障するような政策へと転化していく。この点は以下で更に検討するが、このような生産力上昇の組織が形成されてもその組織内の各産業部門では、資本主義的価格法則が支配すると彼が述べているのは問題だ。この価格法則は、社会主義が全世界的に実現した時にのみ止揚されると考えるのだが、一体、社会主義化された各産業部門に資本主義的価格法則が妥当するという時、その価格とはどういう形態をとっているのか。依然として価値の貨幣的表現として

の形態をとり続けられるか。彼が新しく社会主義化された産業部門で価格法則が残存すると言う時には、その当該部門で価格が補助的に生産向上の刺激をはたす手段として考えていたのではないかと思われる。彼がこの考え方を押し進めて、社会主義化産業では価格の形態を維持されるが、その機能は変化していると断定する時[9]、資本主義社会で価格機能がはたしていた生産規定要因と分配規定要因の両者が、一方では「何らかの機関」による生産決定と他方では生産物配分手段へと分化したことを想定しているわけである。更にそれには、生産の決定に参加する生産者達が生産力上昇に向かうという彼等の意識を前提しているはずである。だとするとそれは、彼が先に政治的変革を一まずおいて社会主義化を経済的側面から考察してきたことと矛盾する。政治的権力を奪取してその権力を引継のが先か、あるいは経済的過程の生産の組織を進めて生産力上昇をはかるのが先か、という二者択一の形で社会主義化の課題を問い、社会主義化の道に於て前者の権力奪取をドロップさせて、労働者階級の意識論に前者を解消してしまったことにその矛盾の究極因がある。

Hilferding の社会化論は、上のような背景の下に成立してきた。社会主義化への道の出発点は、経済的過程の生産力上昇というすぐれて経済的観点から考察される。すなわち、「我々の経済は、生産上昇によってのみ回復することができる。だが生産上昇は、資本主義が崩壊後に経済的に出くわす諸条件を基礎にして資本主義経済の内部で生産上昇へ導くのではなく、巨大な恐慌の発生へと導いたのであり、生産増大でなく失業へ導いたのであった。我々は生産上昇を経済の完全な体制変化(Systemänderung)を通じて達成しようと努めることにより、又経済を個々人の私的意志に依存させるのではなく、今日経済を支配している利潤率上昇の動機に依存させるのでもなく、経済を計画的に配置し全ての社会構成員の必要な欲望充足のために中央集権的に組織することによって、つまり資本主義経済の代りに一つの社会主義経済を置くことによってのみ、絶えず新しい恐慌へ導く欠陥ある循環から及び大衆の貧困から脱する[10]」。

このような形で Hilferding は、経済再建と社会主義化への道を一般的に定立するのだが、その具体的内容は如何なるものであろうか。

(1) R. Hilferding, *Sozialisierung*, S. 3.

(2) Ibid., S. 3, 24—25. R. Hilferding, "Arbeitsgemeinschaft der Klassen?", *Vorwärts*, Dienstag, den 12, Oktober 1915.

(3) これは所謂「労働共同体」の理念に基づいている。この理念の内容は、全体の経済政策の決定を国家に任さずに企業家と労働者との組織間の一致で規制すること、互に対立している経済組織を協同させることによって労働者階級の革命的イデオロギーを脱化させること、労働者階級・支配階級・国家の一種の利害調和論である。R. Hilferding, "Selbstverwaltung in der Industrie", *Der Sozialist*, 7 Jg., nr. 48, 1921, S. 1037, 1039. R. Hilferding, "Arbeits-

gemeinschaft der Klassen?", *Vorwärts*, Dienstag, den 12, Oktober 1915 及び Donnerstag, den 14, Oktober 1915.

(4) R. Hilferding, *Sozialisierung*., SS. 4—5.

(5) Ibid., S. 6. 労働者階級の生計の絶対的悪化と貧困化は、一九一四年の価格を一〇〇とすれば、一九二〇年には棉花五〇〇〇、鉱石一〇三五、鉄塊二六二〇、食料八～九〇〇、賃金五七〇で示される。

(6) R. Hilferding, "Trust und Kartelle in England", *Die Gesellschaft*, 1 Jg., nr.3, 1924. S. 298, 300.

(7) この考え方は Otto Bauer にある。O. Bauer, *Der Weg zum Sozialismus*, 1919, S. 2, 5.

(8) R. Hilferding, *Sozialisierung*., S. 10. "Selbstverwaltung in der Industrie", *Der Sozialist*, 7 Jg., nr. 48, 1921, S. 1040.

(9) R. Hilferding, "State capitalism or totalitarian state economy", *Modern Review*, June 1947, p. 267.

(10) R. Hilferding, Sozialisierung., S. 9. 傍点は原文隔字体を示す。以下同様。

## III

Hilferding は、「社会主義は一つの権力問題 (Machtfrage) である」[1] ——私は彼のこの規定を仮に社会主義の第一規定と呼ぶ——と考え、この「権力」に二つの意味をもたせる。第一は労働者階級と資本家階級との間の力 (Macht) の問題であり、第二は労働者階級が権力に到達する時にどんな経済的な力の手段や経済的基礎を自己の意のままにできるかということである。第一点は周知の政治権力の問題であり、第二点は経済的力の問題である。社会主義が「一つの権力問題」だという場合には上の両者を含むものと考えねばならない。ところが Hilferding はそれらを区別して、社会主義化の問題の場合には専ら第二点を、社会主義の場合には第一点のみを考えるのである。社会主義化は社会主義を創り出すための前提条件であり、過渡期の政策として考えられている。この点では「社会主義化」を「社会化」と置き換えればすっきりするであろう。

かかる視点から彼が社会主義化の条件を、第二点から考察するのは当然であった。すなわち、「社会主義化は資本家そのものが排除される国民経済の組織の意」[2] だとされ、「資本家の排除」を政治的権力奪取という政治的変革の面からでなく、徐々に経済過程に於ける資本家と使用人・技術者との競争関係の中から「国民経済の組織」面から排除していこうとする。この形で社会主義化を考えるとすれば、戦前からドイツ資本が形成してきたカルテルを中心とする資本の組織性、従って生産の組織を受け継ぐ形にならざるをえない。そこから彼は、ドイツや西欧の労働者階級が過去から享受してきた生活水準を少なくとも維持することが社会主義化の最低条件だとみ、もし社会主義化政策により生活水準がダウンすることにでもなれば直ちに労働者階級自身が反革命側に転ずると言う。

この意味から彼は、社会主義化は「生産の上昇・進歩・前進

(Steigerung der Produktion, Fortgang der Produktion)」[3]を確保し破壊しないという「根本条件」を充たさねばならぬという。[4]だから又この根本条件と一致するような社会主義化の方法と速度が選択されねばならないのである。[5]彼のこの生産力上昇視点からは、資本主義制度の枠内で資本の組織性を強化し、国家による合理的な資源配分と計画経済化によって生産力が上昇されてきたことが看過されている。過去の生産力水準を受け継ぐことは、同一の生産関係の下にも異質の生産関係の下にでも可能である。同一生産関係の下での引継は国家権力の強大化を必然的に伴う。それがまさに国家独占資本主義の政策を規定する。国家が経済過程へ積極的に介入し、財政金融政策を通じて絶えず新たな需要を創出し、それが又供給構造を一段と進化させ生産力を向上させるにいたっているのが現状であろう。ここでは旧来の物質的生産力はスムースに受継がれているといえよう。ただそれのボトル・ネックをなすのは労働力商品である。この意味では労働者対策・労働者問題が現時の政策の最大の問題となっているのである。

これに反して異質の生産関係の下で旧来の生産力水準を受継ぐ場合には、二重の困難に出くわす。先ず第一に受け継ぐべき生産力水準の高さ、第二に受け継ぐ主体の形成である。更にこの困難に加重されるのは、第一点の生産力水準が高いほど第二点の主体の形成に有利だと一義的に規定できない点である。このうち第一点からのみ Hilferding は考察し、社会主義が資本主義の発展により条件づけられ又資本主義的発展の結果としてのみ把握されると考えるのであった。[6]

もっとも、彼も社会主義化の条件の一つとして生産上昇を担う主体は誰かという点に言及してはいる。しかしそれは「能力ある労働者(qualifizierte Arbeiter)の援助、指導力ある人々、組織者、技術者、の援助をもってはじめて社会主義化が実行される」[7]という点で触れられているにすぎず、しかも上のような諸層が既に西欧やドイツで労働組合や社会主義運動の中に見出されるとして、これら諸国の社会主義化の前途に楽観的希望をもつにいたっている。それは又、ロシア社会主義が直面している困難を克服する途だとも言っている。

しかし、Hilferding の社会主義化の客体的条件(生産上昇)と主体的条件(生産上昇の担手)とは如何なる形で結びつくのであろうか。彼は客体的条件が資本主義の生産力、それを広義に解せば文化・教育等々を受け継ぐ形で、根本的には経済過程の生産力上昇機構を確立することだという考え方に引っぱられて、主体的条件の方は資本主義社会で生産力上昇機構の構造を熟知しており又実際に資本主義的経営方法を遂行している技術者や使用人等々の援助の下に、労働者階級(というよりは Hilferding にとってはその階級的規定を取り去った生産者として映ずる)が合理的に(つまり生産力上昇を保証するように)産業部門を経営する一翼を担う者としてしか考えられていない。だから彼は、主体的条件と客体的条件を結びつけるものとしての技術者や使用人の増大がそれだけで社会主義化の現実的条件になるという結論に達してしまう。[8]ここにも彼の政治的

権力と経済的力の機械的分離、権力奪取の否定、政治革命と社会革命との機械的区別、経済過程の漸次的且つ民主主義的組織化、等々の思考が投影されている。社会主義化の条件は彼には、それを遂行する主体なき生産上昇論になってしまっている。

（1） R. Hilferding, *Sozialisierung.*, S. 13, 18.

（2）（3） Ibid., S. 13.

（4） O. Bauer も生産を混乱させずに社会主義化すること、生産を少なくとも以前と同じ程度に実現しうる社会主義的組織の確立、の必要性を述べている。O. Bauer, *Der Weg zum Sozialismus*, 1919, S. 5, 30.

（5） R. Hilferding, "Selbstverwaltung in der Industrie", *Der Sozialist*, 7Jg., nr. 48, 1921, SS. 1032—1033. この思考様式は R. Hilferding にとどまらず、当時のドイツ社民党に支配的であった。ここには又、西欧とドイツを先進国として位置づけ、後進国ロシアの社会主義化の道の理解に一定の限界を付さざるをえないものとしてしまう思考を養成した。民主主義の不在と農民が大部分を占めたロシアの社会主義は、成功の見込みないものとドイツ社民党には思われた。それは又 SPD の独特な資本主義観と資本主義発展の不均等法則の無理解によってうらうちされていた。

（6） Ibid., SS. 1032—1033.

（7） R. Hilferding, *Sozialisierung.*, S. 15.

（8） 「資本主義の発展法則の下にあるプロレタリアの中に担い手を認識し、階級運動の中に社会主義への発展を認識する」（R. Hilferding, "Selbstverwaltung in der Industrie", *Der Sozialist*, 7 Jg., nr. 48, 1921, S. 1033. 傍点引用者）と言ってみても、「発展法則」の認識と「担い手」の認識と「社会主義への発展」の認識との主体的立場が不明では法則の利用も社会主義への展望も開けてこない。この認識主体の立場の不明確性は、Hilferding が労働者階級を主体的なものとして把握するよりも生産者として把握し、生産者の一員として技術者や使用人を入れていることに帰因する。（未完）

（一九七〇年三月一六日）（一橋大学大学院博士課程）